

経験に根ざした「中途半端」な生活科

1 生活科における思考力・判断力・表現力について

生活科という教科は「中途半端」な教科である。この「中途半端」という言葉は今年6月に行われた附属小学校授業研修会における生活科の授業協議会で筆者が使用した言葉であるが、まさに授業の中で子どもたちの思考力・判断力・表現力はいずれにおいても「中途半端」であった。砂場を掘り進める中で見つけたブロックを巨大な石と勘違いし、掘り起こそうと色々考えを巡らす。砂場の外を見れば、そこにはブロックの続きが見て取れるはずなのに、眼前の石（ブロック）への興味・関心が高いため、そこに注意はいかない。しかし、筆者は「中途半端」という言葉を悪い意味で述べたのではない。教育者はつい、教育における目的と目標、そこにたどり着く子どもの姿を描き、そのゴールに至る過程が大切だと述べる。しかし、実際にはそうした過程が、目標にたどり着くこと無く過程のままで終わってしまうことも多い。算数科は「 $1 + 1 = 2$ 」にたどり着かないといけぬ教科であるが、生活科は過程が過程として「中途半端」に終わっても大丈夫な教科である。それは理科でも社会科でもない、「中途半端」な教科だからである。逆に、小学校低学年に幼児教育との連続の中で「中途半端」な教科として新たに設けられたのが「生活科」だったのではなかったろうか。その活動の中での思考力・判断力・表現力は成長の過程にあり、常にトライ&エラーを繰り返す。しかし思考力・判断力・表現力が中途半端な小学校低学年のすることである。必ずしも上手くいくことばかりではなく、エラーが頻発することとなる。しかし、生活科という教科は児童の興味・関心が高い「もの」・「こと」からスタートするため、トライし続ける。だからこそ彼らにとってのみ価値のある「事実・認識」に至ることができるのである。つまり、生活科における思考力・判断力・表現力はトライ&エラーを続けることによって育成される為、「中途半端」＝「形成過程」なのである。

2 生活科における思考力・判断力・表現力を育成する学び合いとは

生活科において「思考力・判断力・表現力」を育成する学び合いとは、学び合いによって育成される「思考力・判断力・表現力」と表裏の関係にある。生活科における学びには、児童全員が共有するものと、各個が獲得するものの2種類がある。前者が社会や自然に対する客観的な事実・認識であり、後者はそれぞれの興味・関心に対応した主観的な事実・認識と言って良いだろう。前者の学び合いをするためには、後者の主観的な事実・認識を各自がもつことによって可能となる。つまり、自分の思考力・判断力・表現力で学び取った内容を共通の、あるいは似通った興味・関心をもった仲間と相互交流することによって、学び合い（思考力・判断力・表現力の育成）が行われる。それが重なることによって、全体での共有につながる。そのためには各自の学び（主観的な事実・認識の獲得）が成立することが重要となる。

3 生活科における学んだことをいかすという事

学んだことをいかすということは、学んだ事実や認識を活用する場面があるということではなく、その事実や認識を獲得する為にトライ&エラーしてきた経験と、そこから類推される想像力が、さらなる学習場面や日常生活の場面でも活用できるということである。ということは経験値が高ければ高いほど、類推する可能性は広がり、未経験なことにもいかすことができる。また学び合い（主観的な事実・認識の相互交流や客観的な事実・認識の獲得）をすることにより、疑似体験に近いレベルであっても、経験値は高まる。生活科はまさにその「経験」を蓄える場であると言って良いだろう。1で述べたように「中途半端」な生活科では、自然認識、社会認識の力も中途半端な児童が経験値を高めることにより、「いかす」ということを学んでいくのである。
(共同研究者：島根大学教育学部初等教育開発講座、川路 澄人)